高野山女人堂

心中萬年草

近松門左衛門作

歌女嫌やる。高野の山に。なぜに女松は。生ゆるぞや。なぜに女松が生んまいならば。夜這星でもフシ飛ぶまいか。松より梅より。柳よりお寺小性の稚兒櫻。稚兒文殊の御相傳大師の弘め置き給ひ。俗も尊む若衆の情フシ衆道祕密のお山とかや。地南谷の吉祥院に播磨大名の使者有りとて。庭の掃除の下男小性衆は客殿の。床に掛物臺子の埃掃いつ拭うつ忙しさ。詞是長助關介。掃除が大方出來たらば不動坂まで一走り。お使者が見えるか見て戻りや。地急ぎや〳〵と有りければ。詞いやそれは餘の者やらしやりませ。私どもは皆樣の髪を結はねばなりませぬ。寺方のお小性は俗の内儀と同じ事。地法印樣の奥樣の髪結はずにすみますかと。じやれを眞受の顔ひねて足らぬ心の花之丞。詞ム、そんならこちは法師樣と女夫か。エ、在所の父樣や母樣はうそつきぢや。地山へ登れば魚くふ事がならぬ程に。豆腐や蒟蒻を鯛や鱚ぢやと思うてくへ。山の芋を鰻と思へ。法印樣を親と思へとばつかりで。女夫とは聞かなんだが。詞ア、思ひ當つた一昨日のお日待に。法印樣の相伴で善哉餅を十三杯。地それから身持になつたやら。フシほてれんぢやと腹さすり。地傍輩は皆小小性の顔を赤めて挨拶せず。久米之介は年嵩にてなう花殿。詞笑止な事いふ人ぢや。是にござる主膳殿八彌殿右門殿。年は三ツ四ツ下なれど。こなたの心が足らぬ故なぶられてゐさつしやる。地こちは他國者なれば當地ではこなたの里を頼みにして。一家同然のこなたを笑はせて本意でない。此の久米之介がゐる内は悔らせはせまいが。追付けお暇申し受け國へ歸つた其の後では。高野一山のなぶりもの少たしなんで下されと。いへばむつと腹を立てどんな事いやんな。詞法印樣の女房が法印樣と並んで。善哉餅くうて孕んだが可笑しいか。コレ忝くもおれが親は。神谷の宿で隱れもない雜賀屋の與治右衛門。地かゝ樣と一つに何時も物を。くやるでおれも生れる。お梅といふ美しい妹迄生みやつた。そなたもいつもこちへきて。妹のお梅と二人藏へはひつて。善哉餅をくはしやるやら。お梅が聲でうまい〳〵というたを フシおれや聞いたぞと言ひければ。地久米之介は赤面し殘りの傍輩口々に。賢い人のいふ事を氣にかけては果がない。さりながら正直な法印樣のお耳へ入れては言譯ならぬ。小性仲間の恥辱なり沙汰しやるなと制せられ。六尺どもも聞きながし。阿呆に油斷はなほならぬとオクリ目まぜ〳〵してこそ入りにけれ。地稍あつて表より。詞成

田久米之介様に逢ひましたい。お國の親御武右衛門様よりの飛脚なりと。地若黨一人刀の先に。文箱付けてつゝと入る。詞ムゝ久米之介とは身が事。國許よりの使とは氣遣はしといひければ。いや別儀にてもなく御老體の武右衛門様。御隱居の願に付き。久米之介を呼び戻さんと御一門の談合極まり。地法印様への御狀段々の御口上。とかくは首尾能くお暇の出る様に。御傍輩様たちへも賴みませとの御使と。文取出せば久米之介是は思ひよらぬ事。父が老後の大望を違背ならずと云ひ乍ら。我が口からは申されず何れも傍輩いひ合せ。お暇の出る様に取合せ賴みます。狀も進んぜてよい様に何れもに任すると。手を合すれば人々も心一ぱい申してみんと。一度に座敷を立ちけるが花之丞ふり返り。詞是久米殿お暇もらうていなしやらば。糠袋はおれに下され。地巾着にして穴一の。粒入れますと打連れてオクリ皆々へ奥にぞ入りにける。地飛脚はそつと側により。詞申しお國からとば偽り。雜賀屋へ出入いたす。岸の和田の九兵衛と申す駕籠の者。お梅様のお賴でひそかにお瞞し致せと有る。彼の御存じの京の紙屋此の中下つて逗留し。二三日中に祝言し。其の明くる日お梅様を京へ連れて參るとて。地内方にも御用意とかくお前が片時も早く。山をお出でなさるゝとどこぞへ一所に立退くか。分別も有る所それ故内々約束の如く。お國の親御の贋狀でお暇取つて今日中に。久米様連れて來てくれといとしほやお梅様。涙を流し手を合せお賴みなされた手前も有る。どうぞお供致したし委しい事はお筆にと。懷中よりお梅が文取出してぞ渡しける。久米之介も心せき成程々々其の筈。其方も知つての上なれば隱す事は少しもない。外の者に添はせては生きてゐられぬ二人の中。親の命と有るからは法印料簡ないとても。暇をひすて出でやすし先づ文見んと封じ目切り。讀まんとすれば南無三寶。上包はお梅が文。久米様との名宛にて中は吉祥院去印様參る。成田武右衛門親の文。詞ムゝ扨は聞えた。お梅が常々男手をよう書く故に。國許の狀をも人賴みするなと下書かいて渡せしが。地隱し忍んでする事とて封じちがへて我が文が。法印の手に渡つたか。これは〳〵と色ちがへ。立つても居てもせんかたなくフシうろたへまはる折からに。詞主膳立出で是々飛脚。詞法印直に問ふ事有り。地先づ休息召されとの事なりと。いひもあへぬに久米之介なう主膳殿。詞最前の文を法印様ははや御披見なされたか。封じ目お切りなされずばそつと取て來て下され。一期の御恩といひければイヤ其の狀は。法印様繰返し披見有り。反故棚へ入れ錠おろし。手が汚れた勿體ないとあとで手水をなされたが。地いかなる狀でござるぞと問へども譯は話されず。はつとばかりに胸躍らし。詮議に逢はばどうせうと。飛脚の九兵衛が心迄。細谷川の丸木橋フシふみかへ

れとぞ祈りける。地時に麓の山どよむ木遣に法のひんよるい。聲播磨路の大名より御墓。引くこそ三重〳〵殊勝なれフシ則ち宿坊。地吉祥院僧達立合ひ石塔請取り給ひければ。使者は座敷に直りける法印やがて出迎ひ。詞遙々のお使者御大儀〳〵。いざ〳〵是へそれお盃。地お茶もて參れと挨拶ある使者の侍慇懃に。詞旦那が悲母第七年に當りし故。御當山に石碑を立て日牌を供へ申すにつき。祠堂銀五百枚奉納致され候。地御受納あつて末世末代。不退轉の御回向頼み存じ候と。包の白銀目錄添へて渡しければ。武門の御身に御信心御孝行の御追福。感じ入り候。詞それ我が山に卒塔婆一本遣せし人は。五十六億七千萬歳の後。彌勒の出世に逢はせ給はん御誓願などか疑ひ候べき。地先づ此の銀子の請取認め申さんと。法印奥に入り給へば豫て用意の勝手より。銚子盃重箱や。はや吸物の椀折敷フシ善盡したる馳走なり。地後住の弟子祐辨律師を始めとして。納所同宿入り替り立ち替り。山中と申し風情はなくとも御時分よし。お吸物でもお代へなされ。詞それ小性衆相手になつて御酒一ツ。地ゆるりと上つて下されとあひしらへば愛敬の。小性はおあいと色めきける使者も數献を傾け。詞扨々御器量なる小性衆。何れもお名は何と申す。御生國はいづく〳〵の御方ぞ。仰せ聞けられよと云ひければ。我等は有村主膳と申し當國田邊の者。私は世嗣八彌と申し大和の者。身どもは伊賀の上野の生れ。小栗右門と申します。地わたしは此の麓神谷の宿。雜賀屋の花之丞。年は十九で法印様のお内儀。わたしが妹にお梅と申してずんど伽羅めでざれども。惜しいことは女子でほん様のロへはひりませぬ。わしが顔は花のやうで花之丞と申しまする。詞妹をお梅といふわけはどうした事か知らねども。あの梅といふ物をこなたは割つてみさしやつたか。中にひらたい物が有る。地こちのお梅が中にもそれが有るやら無いやら。ついしか割つて見ませぬフシ無念な事とぞ眞顔成る。地使者も返答し兼ねれば傍輩は笑止がり。是しい〳〵と袖を引く。久米之介はお梅が噂聞くに付けても彼の文の。法印の手に渡り今や詮議の有るかとて。思ひ痛める胸の中釘を打たるゝ八すの。給仕も更に手につかずスエテ目に涙持つばかりなり。詞使者重ねて。御自分はお年嵩と見え申す。お名は何と生國はと問ひければ。我等は播州飾磨。成田武右衛門悴同苗久米之介。ムゝ扨は同國武右衛門子息高野に有るは此方かと。地見上げては泣き出し見下しては涙にくれスエテ打ちしをれて見えければ。地身に思ひある久米之介心だよりもなき折から。故郷の人のしみ〴〵の涙にほだされ側により。詞一見に剛々しき事ながら。同國の好と申し御落涙の様子。御心底のやさしさも推し量つて頼み奉る。私こと此の山に。一夜も足をとめがたき身の難儀出來致し。幸ひ國よ

り迎ひも參る。具の事は籠にてお物語致しません。地お詞を添へられ法印より暇を取り。今日中に此の山をつれてお出で下されば。生々世々の御恩に請け命の親と存じませうと。身の置所無きまゝに。粗忽の無心も戀路ゆゑ。フシ若氣故こそ是非なけれ。地使者は膝を立て直し是久米之介。詞お半が山へ上つたは末は出家の筈なるに。今此の山が出たいとは還俗したい心よな。ヤレ出家する因緣を忘れたか恨めしい。お手前十二歳の時。傍輩伊吹重太夫が二男。卯之介といふ十一に成る友達と。鶏合の友達喧嘩にあへなくお主が手にかゝつた。卯之介が兄伊吹千右衛門とは身どもが事。其の頃は數年の在江戸後日に聞けば殿よりは。切腹との御評定。父母が料簡にて。子の可愛いは同じ事親たちへ歎きをかけ。討たれし者のためでもなし。出家させて幼い者の後世弔はせんとの扱にて我が親どもが命を助け當山へは登らぬか。地一人の弟が死骸をも見ぬ懐しさ。せめての形見に其方を一目見たさに此の度の。お使を望みうけ小性衆の名を尋ね。久米之介と聞くよりも弟が在るならば。今年は十八蕾む花つれなくも討つたかと。思へども改めて恨をいはん樣もなく。仇を恩なる出家して後世を助けてくれるかと。思へば形見の心地もする恨めしいとゆかしいと。未練の涙をスエテこぼしたが悔しいぞ久米之介。詞たとへ親の敵でも。出家は格別在家となれば見のがし置かれぬ弟の敵。地此の山が下りたいとはそれこそは望む所。籠に下つて八年以來鬱憤を散ぜん。法印に斷り申すため御意を得んと立つ所へ。法印かけ出で樣子詳しく承る。詞やれ若衆め。汝はいまだ髪こそ剃らね。九字護身法傳授して。禮拜化敎も勤むれば出家も同然。殊に大師此の方結界清淨の御山。かりにも女犯の穢があれば。一山荒れて震動し。其の身は狗賓に五體を裂かれ木の枝にかけらるゝは。地目にも見せ話も聞かうそれを知つて此の寺を。ようも〳〵けがしたな。詞國許の親から珍しい文を得た。此の年になれども思ひまゐらせ候べく。御言のごとく二世三世。魔れ〳〵と血判をするた小舌たるい女子文。手に觸れたは今日はじめ。地梅よりとは誰がこと皺の寄つた此の法印を。梅干に譬へたか師匠と思ふな弟子でもない。あのお使者の手にかゝり死なうが生きようが構ひない。あれ引きずり出せたゝきだせ。十一から敎へた經文も眞言も。魔道へ棄てたか勿體ないと。腹立涙にくれ給へば久米之介は伏沈み。在りあふ小性同宿も。側から何と千右衛門フシ呆れ。果てたるばかりなり。地祐辨律師走り出で久米之介が袴腰。割るゝばかりに踏みつけ〳〵引起し。歯がみをなして涙を流し。詞エヽ見損なうた伜め其の根性とは夢にも知らず。同胞の契約のねんごろしたは何事ぞ。雜賀屋にはお梅といふ若い娘も有るほどに。出入するには行儀が大事浮名ばし立てられ

な。若衆のたしなみ是第一。兄分に恥かゝすなと立居にいうたを忘れたか。是千右衛門殿。今迄愚僧が存ぜしは彼めは敵持つたる身。もしも狙ふ人あらば拔身の下へ此の法印が。かけ入つて討たれんと一命やつたる中なれども。地只今ねんごろ切る上は金胎兩部の大日も。御照覽ましませ不便とも存ぜず。御舍弟の敵サァお手にかけられと。座敷の下へ取つて投げ俗の女を慕ふより法師の身にて少人を。思ふは幾千まさるぞや其の兄分を袖になし。志を無下にした憎や無念やあさましやと。氷の樣なる眼より涙をスエテはら〳〵とぞ流しける。地千右衛門續いており。心無いには似たれども寺を出づれば弟の敵。討たでは武士の道立たずと。するりと拔いて背打に四ツ五ツ。丁々と打ちつけ。是からは死したる人此の方遺恨なき上は。心次第に師弟の中何とぞ挨拶致したいと。さすがは武士の神妙さ久米之介わつと聲を上げ。只今の背打もうつてうたるる身の報。恥辱とも思はねども。山の名殘に法印樣の御機嫌損ふ悲しさと。二世と賴みし兄分を袖にしたとの恨の詞。悲しうて〳〵死んでも迷と成りまする。とくに髪を剃つたらば此の悔みも有るまいもの。坊主頭のすげない顏兄分に見せる悲しさに。せめて二十を越す迄と鬢を撫で顏つくり。身だしなみが身の敵お梅に思ひそめられた。スエテ是も前世の因果かや。地お梅に逢うてことわり立て。緣を切つて來ましたら元の樣にねんごろに。かはいがつて下さるか。詞をんでもない事女と緣さへ切つたらば。身に代へても法印樣へ詫言申してねんごろせうが。誠緣を切らずは大師の罰を受けうといふ。誓文を立てうか。地いかにも誓文立てませう。サァ立てサァなんと。エゝこちは切らうと思へども。お梅が合點せぬ時は。なんとしませう悲しやとスエテかつばとふして泣きければ。詞それ其の心のつくこそは鼠の當つたしるしぞや。地はや出て失せうとどうどふしフシ共泣するこそ道理なれ。地其の際に法印以前の文を取出し。山に置くはけがらはし持つて失せうと投げつけ給へば。恥かしさうにそつと取り肌慢に入れけるが。男女破戒の御咎俄に吹きくる天狗風。岩も枯木もどう〳〵どう震動雷電雨霰。天地一つに黑雲覆ひ長夜の闇とぞ 三重〳〵成りにける地すは一山の大事なり。不動坂迄追出せと下僧下部が小腕引つ立て。棒よ杵よとひしめいたりさすが好みの花之丞。詞是久米殿。妹が事は氣遣ひさつしやんな。こなたの居所知れる迄はおれが女房に持つてやろと。地聞くも苦しき名殘の山鬢も髻も引き亂れ。涙亂れて目もくらくさらば。〳〵と振返り泣く音も枯るゝ聲や。お梅に通を失ひし久米が。心ぞ 三重〳〵哀れなる。

中之巻

フシ逢はぬ昔の。白紙も。忍び重ねて厚紙を。人に裂かるゝ横紙に。袖濡紙の。漏れ

やすき。浮名やばつと塵紙のオクリ嵐に〳〵もろき鼻紙やまだ十七の懐子。フシ名さへお梅は氣もすしや。地親與次右衛門いき〳〵として外より歸り。詞お梅が祝言いよ〳〵今宵に極つた。地今朝いひ付けた通り市介傳九郎鱠をかけ。なつよ雜煮の用意せい。たけ膳立もきれいにせい。婿殿は京烏丸の人なれば。黒椀がよからう。塗盃は入らぬぞ年のいかぬ娘ぢや。土器を三寶に口取は駄斗昆布。肴は鰻車海老。熊野から貰うた鹽貝があらう。詞ヤ鹽貝のついでに地女房どもはどこにゐるとフシ嬉しがるのも親心。地お家様は中二階に。お梅様の髪梳いてといひければ。詞二階の口迄かけあがり。こりや〳〵宿老殿へいて談合した。皆内證勝手づくの祝言なれば。弘めは重ねて下つた時。地今宵盃すんだらば娘はもはや聟の物。とんと先へ渡いて女夫づれで明日早々。上してのけといはるゝと競ひかゝる親の顔。見るよりお梅は涙ぐみ急な事いうて下さんす。盃さへ延べてほしけれど親のこうけん是非なうて。どうなりともといひました京上りは先づ待つて。氏神へも參りたし阿呆でも兄は兄。花様にも知らする筈。日頃懇切遊してお守りよ御符よと御恩を受けた祐辨様。お山にはまだ外にもと其の人の名はいひかねて。思ふあたりをかすらする フシ是も思ひの餘りかや。地母親も打ちうなづきヲヽそれもさうぢやがこんな事。詞ねんごろな方へ知らすれば。聽の祝儀のと厄介かけるが迷惑ぢや。地とかく聟御の心次第サアござれと。納戸へ入れば與次右衛門是かゝ。詞聟の供の者どもこれの内の奴等にも。何かなしに三百づつお引をやる合點ぢや。筒ごかしの顔でつらりと九文十文づつ。百の口を拔いて置けや。ハテこなたもあんまりな。地お梅が一世一代に何が惜しいぞ。やつぱり九十六文で。百づゝやつて置かしやれとオクリつれて〳〵納戸に入りにけりフシお梅は幼き。時よりも。あまやかされて二親に我儘いひし習はしも。心に疵を持ちたれば スエテいぶりもならずすねられず。詞アヽ九兵衛はなぜ遲いぞ。久米様の返事は地と そろ〳〵表へ出でけるが。女子丁稚が口々によう お梅さま。晩には立聞致しましよ京のおか様にならつしやると。なぶられても浮き〳〵せずヲヽ何いやる。京へいこやら冥途へいこやら知れた事かと門に立ち。坂を見上げてゐる所へ久米之介は頻被。九兵衛も投首して辻へ見ゆれば走りより。なうよう來て下さんした文にいうてやる通り京の奴めと今夜盃する筈で。わしが氣は今朝からとんと死んでゐたわいのと スエテ縋り付いて泣きにけり。詞ヲヽそなたは氣が死んだかわしは叩かれ引きずられ。身も心も死にまする。地うそなら是と手を取つて。袖から背中がハア。詞たんと腫て有るわいの。鬢もそゝけた顔も泣いた顔ぢや。地こりやどうぞいのといりわりも フシ言はず。知らずに泣きゐたり。地九兵衛不粋な調子

にて。飼エ、粗相なお梅樣。文を封じ添へて久米樣への濡文が。法印樣のお手に入る。地何が日頃法印樣眞言陀羅尼讀んだ目で。くどくは御見思ひまゐらせ候と。讀んで婆羅尼甘掲諦を立て。菩提娑婆訶なる顏つき。念者坊の祐辨樣は踏殺すとてにぇさつしやる。一災起れば二災起る。お國からは弟の敵ぢやとやら申して理窟くさい侍が背打をくらはする。弘法大師御入定八百年此の方の。一山の大騷ぎ飛脚の詮議も有りさうで。私は据つた膳箸も取らずに隱れゐる。其の間にお山が荒れてきて天狗殿が鼻を怒らかし。大雨大風雷逢大事の山を久米之介が。濱したと叩き出されて フシ斯くの體にておはします。地お二人のお陰で煙草入を落しました。詞中に頼母子の掛錢七十四文あつた物。定めて狗賓に攫まれたでござらう。地正眞の天狗賴母子ぢやと フシぶつくさいふも道理なり。地ヲ、其の樣なこと内へ沙汰してたもんなや。山は荒れても崩れても。久米樣に逢へば嬉しい〳〵。こな樣嬉しうないかいの。ちと笑ゐて見せて下さんせと。いうても後前思はれて フシ泣顏見ゆる不便さよ。地親はお梅よ〳〵と門口見やりて誰ぢや。飼ヤァ久米樣か。九兵衛是は何として。呼びにやりたい所へようこそ〳〵先づ内へ。地かゝ久米樣がござつたぞ暮れたになぜに火はとぼさぬ。お梅が祝言常とは違うた。二階は蠟燭庭もおうへも燈心を。つかみこんでくわつくわとやれと。勇む所へ母親はなりふりを心得難くや思ひけん。詞いつのまに九兵衛は宴へも寄らずに山へいて。お梅が祝言聞いてお出でなされたかと。地不審さう成る顏色を九兵衛見て取りつゝと出で。詞久米樣のお仕合まだお聞きなされぬか。お國の親御御隱居で跡目をお繼ぎなさるゝ筈で。私も在所から。早飛脚に雇はれ打通りに上りました。地日頃のねんごろ暇乞のため。ちよつと連れて寄つてくれ。祐辨樣も追付けそこへと有る事。今日からは是七百石の御世嗣。詞旦那樣ものは談合。お梅樣の御祝言まだ盃なされぬさき。あちらを變改なされて久米樣へ進ぜられまいか。地私やお爲申します。祐辨樣も大方其のお心と見えました。千貫目持ちても商人は。一時の損が知れませぬ。照れ降れなしに七百石すればお前もお手柄。雜賀屋の婿殿がひん〳〵はねるじや〳〵馬に乘つて。娘御は金物の乘物に乘らつしやる。サァしやんと打ちませうと手を擴げてもィやまあ打つまい。詞ハテねちみやくしたそんなら舅御夫婦も。地乘物やじや〳〵馬とフシ乘せてもいかな乘らばこそ。詞いや〳〵馬は馬づれ牛は牛づれ。けふ祝言する婿殿は。京三條烏丸美濃屋の作右衛門。お梅をほしいばつかりで年々の殘銀九貫五百匁。百六十兩で帳消して。此の秋の買入に紅花の花のやうな小判貳百五十兩。先へ預けて置かれた。地今宵の物入し拵らへ此方には一文入れさせず。娘を裸で請取る婿は世間にちよつと有

りかねる。なんと九兵衛といひければ。詞いや久米之介樣も小判の事は請合はれぬ。お梅樣を裸でならば鬼に鐵棒でござりましよ。地コレ阿呆なことはいはずとも婿がおじやるか出て見よ。これお梅久米樣二階へ連れまして。新しう出來た寢道具を見せましや。詞こりや女子ども。地者を風にひかるるなと鼠の用心しながらも。二人二階へ上けたるは是こそ猫に鰹なれ。二階には古渡りの。大紋緞子の夜の物。二ッ枕の總つきを。嫉しさうに久米之介。詞ム、京の男と此の枕を並べて。地此の夜着をきて二人しつほりと寢さんしよの。ア、ひよんな物見せて。又泣かせて下さるかと ッシほろ〳〵涙を流しける。詞エイいやがらすやうな事聞きたうない。京の奴となんの寢よ。今夜中につれ立つて走るぞゑ。胸を極めて下さんせ。地此の夜着蒲團に今の奴が寢くさる筈。エ、いやらしいうるさやと踏みちやちやくつて投げ拂り。是は又わたしがの新しい寢道具。祝うて寢初めてほしけれど人が來うかと氣遣ひな。ア、辛氣やと壓みし夜着にもたれあひ。誰もなこそのせき心。花のお梅に鷲の ッシ人來といとふわりなさよ。地時に美濃屋の作右衛門小者をつれてつゝと入り。與次右衛門が髻を取つて引寄する。女房はじめ下々もこれは聊爾と取りつくを。詞寄るな〳〵とぶち拂ひ取つて引つすゑ。こりや與治右衛門。京の者をはめだてしたら返りをくはう用心せい。親代々の得意で二十年此の方。二千貫目足らずの商ひに九貫目のほこりを取り。先も見えぬ秋買に十五貫目の前銀取り。祝言の仕入れに四貫目取り。男の有る娘をかづかせて去らせて構はぬ工面ぢやな。此處らではまだ流行るか。京大阪では其の手の奸曲は廢つた。地サア娘の首を渡すか廿八貫目戻すか。二ッ一ッの返事を聞かう。詞ヤイ一升入る袋は海川でも一升。運のよい者の仕合見よ。地盃せぬばつかりで廿八貫目拾うた。恵比壽大黑がのりうつゝた作右衛門を瞞さうや。 ッシ置いてくれとぞ罵りける。地與次右衛門眞直者ぐつとせいて。詞ヤア京々やかましい。蛸桁がすぎる。七十萬石の下に住む與次右衛門。氣の狹いおのれらが蔑みとは遙はう。銀返すはやすけれど。いひ詰められて戻したと。いはるゝが口惜しい娘にも疵がつく。サア男のある證據を出せ。どこぞで藥を焚かれて銀が惜しうなつたか。慮外申した御免あれと詫言させて其の上で。是非に祝言させねば娘の垢が拔けぬ。地サア證據を出せとにちければ家内の上下しみこほり。二階には遁場もなく。死ぬるより外分別の ッシ泣いつ顫うつうろたゆる。地作右衛門押鎭め證據々々と涼しさうにいやるな。詞身は明日立つが合點で今朝からお山へ上つたが。八ッ時でもあらうか俄に山が荒れ出して。大雷雨風一期に覺えぬ怖い事。さる寺へ駈込んで樣子を具に聞きたれば。南谷吉嗣院の小性久米之介といふ者と。

雜賀屋のお梅と數年密通して山を潰した其の祟り。それゆゑ今追出さるゝと一山が見物後姿をおれも見た。飛脚のやうな奴が供して麓へ下つたと。地いふより九兵衛もじり〳〵と門の方へ後退り。亭主もはつと二階を見れば女房賢くいや〳〵〳〵。詞其の分では胡亂な此方の人。娘が垢を脫かつしやれ。うろたへて娘一人捨てさつしやるな。地これ〳〵と膝をつけば合點し。ヲのみこんだこりや男。詞雷が鳴つたとてこちの娘が不義のある證據にはなるまいぞ。地どうでも今宵祝言させ括り付けて往なさねば。雜賀屋の與次右衛門が町へ面が出されぬ。手柄に婿にして見せう。ヲヽおれが身代見かけては定めて婿にほしからう。二十八貫目の金では疵のない手入らずの。女房が持たるゝおれが銀でこしらへた。夜着蒲團から取つてくれうと二階へあがれば與次右衛門。腕ねぢ折らうと引きおろしッシ上を下へと攫みあふ。地久米之介は脇差拔いてすはといはゞと縋り付き。お梅がわつと泣く聲も下には聞かず叩きあふ。女房中を押分けてこちの人から默らッしやれ。待つて下され婚殿とあなたを拜みこなたを拜み。漸う兩方押鎭めスエテかつぱと伏して泣きけるが。地都家とも覺えぬ物の情のない事や。是程迄取り結びサア祝言の場と成つて。打破つてこち夫婦世間が立たうか身が立たうか。男を持たぬ娘子はたが身の上に何事の。あるまいとも フシ言ひ難し。地過ぎつる事に兩親が迷惑するを聞くならば。氣の細い娘なりさきの小性も堪へかねて。死なうとするは必定止めに行かるゝ時宜でもなし。詞必ず死ぬるな死ぬまいぞ。此處は死ぬる場でないぞ親に慨きをかけるといひ。其の身も無い難うける事。親孝行と思はゞ必ず死んでくれるなと。地まつ斯ういうて止めたらばよもやとは思へども。若い心の一筋に。恥しいとばつかりで。若しや死なうか悲しやと。知らせの詞一つをも皆兩方へ架橋の。二階にも聽取りて拔いたる脇差さすが又。死にもやられず聲立てずッシ抱き。合ひてぞ泣きゐたる。地なう親はどれも變らねど。母の名汚すも濯ぐのも。娘の育ちの善惡から。詞お梅が一期の疵つけば。三十年添うたこちの人に面かい拭ひて添はれもせず。地是非に一旦盃して男の手柄に何時でも。退き去りは世の慣ひ子が立つてこそよくもあれ。星財家財代なして返す物を返やさずに置く與次右衛門でさら〳〵なし。母が此の歎きを聞きお梅が爰へ出るならば。それを機に和睦して祝儀を渡して下され。詞たとへお梅が我を立てゝ座敷へ出まいと云ふとても。さきの小性も木竹では有るまいし。先づいきや〳〵といやる筈。地それもきかねば不孝者子を一人育つるに。生きる瀨か死ぬる瀨が七度あるとは幼い内。十七八に背丈伸び親に夜のめも寢させぬか。憎い者には世話やかぬ子を持つたらば思ひ知らうぞ。恨めしの世の中や

とフシ壁を。あげてぞくどきける。地久米之介も聞取つて。後はともあれ親御の心休める爲。詞涙も拭うて下りてたも。地拜む〳〵とすゝめられ。口惜し涙ひつしよなく階子とんとん踏鳴らし。勘下りて是かゝ樣。詞徒も惡性も。男持たぬさきならばいはれぬ構ひぢや有るまいか。地それに意地むぢいふ人は放からかいて置かしやんせ。わしが斯うして出るのは詫言といふもの。それでも合點ないからは氣に入らぬで有らう迄。田舍育のわしぢや者なんの都の目に入らうと フシ身振もすねて見えにけり。地婿はお梅にゆすられにつこと笑ひ。詞是親爺お袋だまらつしやれ。あれがこゝへ出てくれて今の詞で千倍ぢや。頭の上で踊つても去ることではござらぬ。地サア寢所へと手を引けば二親星内打ち凋ひ。ハヤめでたい〳〵さりながら先づ宴で盃ごと。其の間にそれ〳〵と氣を付けてもがけども。否々今宵も四ツ過やがて夜半寢るまがない。めでたう閨の盃と フシ寢所急ぐ氣の毒さ。地平にこゝで酒盛なされ其のまに内外の者一献酌めや酒を酌めそりや酌め〳〵とあがいても。いづくへ落さん久米之介。夜着引きかづき身を縮め生きたる心地はなかりけり。婿は蒲團にのしあがり。ヤア誰ぞ寢たやら暖かな。さらば此の夜着を着て盃せうと。久米之介が臥したる夜着を取らんとすアゝ是々。詞こな樣ばかり寢ようでの。とんと二人が一度に寢る。盃すむ迄いかな事夜着に手をもかけさせぬと。地もたれかゝりし夜着の袖。足をさすり手をしめて夫に力を付けければ。一ツに寢ようは忝い銚子早うと呼ぶ内に。夜半の鐘も鳴渡る下には夫婿手に汗握り。九兵衛其の外小隅へより供の者にも酒盛つて。醉うた時分に臺所の火を消して閨にせい。二階の酒のしゆんだ頃祝儀の石を打ちこんで。驚ぐ拍子に蠟燭を踏みこかし。どやくや紛れに久米殿の手を引き門へ脱かさうぞ。仕損へばお梅が首がないぞぬかるなと。謀し合して酒肴下では下人盛りつぶし。二階を母の酌人はオクリ怪我あらへせじの フシ氣遣や。地作右は母に辭儀もなくさいつさゝれつ辭儀作法。大盃四五杯引きかけなうお袋。詞姑に酌取らせ無益しいか知らぬども。斯うめさつたがよい筈。作右衛門程の婿は慮外ながら取りにくい。久米之介は若衆で前髪は有らうが。おれが樣に小判の前髪は有るまい。あの樣な奴等が娘子どもを咬かし。京大阪にも有ること大方果ては心中。ホヽいやな事。お梅は命拾らやる。親御は娘拾らやる。地おれは盃拾らはうと又三杯引き續け。サア寢ませう。お袋あちへ往なしやれと。夜着引き立てんとする所へ大石をはたと打つ。是はと驚く頭の上障子雨戸を打ち破り大石小石隙間なくはらり〳〵と 三重へ投げければ。地お梅は宴を大事ぞと久米之介に抱きつき。作右衛門はひよろ〳〵足お梅はあぶない夜着被きやと。立寄れば母親燭臺を踏みこか

し。詞やれ闇いわ火を點せと。いふ聲に與次右衛門下の火殘らず吹消して フシ常闇の夜と成りにけり 地母は這寄り久米之介が手を取つて引出す。喫驚するも夢心地お梅は久米が帶を取り。ついて出づるも闇の夜の母ばかくとも知らばこそ。作右衛門度を失ひ。詞お梅はどこにイヤ爰に居まする。闇がりで怪我しやんなお袋はどこへぞ。火を取りにでかなござんしよ。こな樣勝手知らずぢや動かずにござんせ。地私もこゝにゐますると聲が殘れば母親も。一人と思ひ連れて出るお梅は跡も恐ろしく。母に知らせぬ足音をば火を踏むごとく爪立てゝ。ふるひふるひ沓脱迄忍び出で。母久米之介に囁きて。詞こゝたは命の無い人なれどお梅が慨く不便さに。こち夫婦が料簡で今宵の命を助ける。詞お梅は男定まれば思ひ切らねばならぬぞや。是はお梅が呑んだ盃是を形見の緣切と。懷に入れければ二人は死ぬる覺悟の上。心の中の暇乞顔は見られぬ暗闇に。ま一度聲をとためらへば遲いと氣をせきて。急ぐは我が子の死を急ぐ產み出すも母死なすも母。生死二ツの門口をあけて出で行くさきも闇。跡も子故の闇の夜に迷ふ親こそ三道〳〵悲しけれ。

久米之介お梅道行　下之卷

歌まぼろしや。定業の。限とはいかに。いかなる塗婆やらん。世は何の。たとへぞや。逢ひそめてはや三歲。かげばかりの。契にて。つまは野中の一つ井戸名は。後の世の。形見かや。殘す形見は フシ親の爲。我は其樣の前髮の。永き來世もわしが此の直さぬ額此のまゝで。見たり見せたり六道の。フシオクリ辻の。巷は。多くともはぐれまいぞと。夕月は。はや入り果てゝふけわたる。まだ二月の八重霞。スエテ隱れ忍ぶによけれども。顏が見にくの朧夜や オクリ二つ〳〵よい事あらし吹く木の下露の玉川の。地海の雫も降るならば。身に疵つけず死にたやと顏とをすり寄せてこぼす涙は自ら。互の口に傳ひ入り。フシ末期の水と成りけらし。ヘエテ刄を急ぐ我が命。末短夜の。春の霜後。しやな朝まで。消え殘るかと白妙に オクリ里の。夜業も時過ぎて。ほすや神谷の宿はづれ。フシ生れ在所の名殘さへ。親より殷を。思ふぞや。我はそもじの親御の恩。戀と思ひに縛られて。情の絆縛の繩。フシ不動坂にもさしかゝり。死出の山路を越ゆるかと。歌心細しや率塔婆谷。こゝな塚はと引きとめ問へば。爰は古の苅萱殿の。地茂りし春の草。クドキ問うて語つてあぢきなや。かの苅萱弓取の。猛き心や梓弓彌生の空の月の前。櫻が下の盃にオクリ開いた。花は散りもせで フシ花の苦に。身を捨てし。無常の世語り。身の上に。十九十八一盛り今宵散り行く初櫻。兒が瀧とぞハルフシ涙ぐむ。あれへ越ゆれば尼の口。去年母樣とつれ立つて拜みし。事の忘られず。哀れ佛の御母も。女の罪の捻岩や。それさへあるに我が身の科は。歌五月雨。ヨほど。戀ひしたは

れて。つひにナ。秋田。のヨ落し水 地山は。眠りて物いはず。谷の流れよ フシ聲立てゝ。地人に語るな此の姿。わしが心をこなさんに隠す事とて持ねども。頼む佛の御名とへば我をば外の不動樣。二親よりも棄てがたき。さぞや若木の花の兄慨き恨の數々も。二人が上に罰受くる。天竺の。山おろし。しめた膚に。しみじみ〳〵とサア悲しゐ。フシいとしといふも。今の間の冥途の苦患覺束な。此の世からさへ嫌はれて深く心を奥の院。渡らぬ先に渡られぬ御廟の橋の。危なさも。後世の見せしめ蛇柳や。鬼が千疋責めうぞ フシ責められつ。さいなまるゝと離れまい。故すまいぞと取りかはす。袂は涙手には數珠。頼めや頼め一筋に。一心頂禮萬德圓滿釋迦如來眞身舍利。フシしやりしやり佛に。成るとても又は三途に迷ふとも。一つ回向の水汲めや手向けの。梅の花折坂たどり越ゆれば曉の。五障の雲に埋もるゝ女人。堂にぞ 三重へ着きにけるフシ若い心の。一向に。死んで來世で〳〵と。思ふ心のがつくりと。サア着きました嬉しやと フシ勇むは跡の歎きなり。地堂の内には我より先泊りし女中の目を覺し。申し。申しと呼びかくる。あいといふのも怖氣立ちスエテ身をだき。合ひてるたりしが。問イヤお氣遣な者ではなし。私は播磨の飾磨にて。成田武右衛門娘さつと申す者。南谷の吉祥院に久米之介と申す弟を。地尋ねて今日の暮方下人どもを登せ問はせても。在りとも無しとも知れがたく。坂の麓神谷の宿を尋ねよといふ人も有り。皆樣所のお來かも若し御存じも有るまいかと。他人に見なす姉弟 フシ後世の闇路も知られたり。弟は骨肉恩愛の涙にくれて返答もなう。暫しためらひ居たりしが。問久米之介とは聞きたる人。昨日の畫より俄に大病引きうけて。今宵限りの命なりと申せしが。地夜明けなば生き死の定説かくれ有るまじと。涙をかくす聲つきを姉はそれともなほ知らず。問さればこそ思ひ當つたれ此のお山の萬年草は。人の命の生死を示し給ふと申す故。餘りの事の訝しさ。守りに入れし萬年草をあの谷川の水に漬け。地久米之介と心ざし半時ばかり浸しても。次第に枯れてしぼみしが弟が命有るまいとの。大師樣の御告か遙々と尋ねきて。昨日にも着くならばせめて死目に逢はうもの。男の身ならば一山を駈廻つても逢はうもの。女と生れし惡業は。あさましや悲しやと フシ聲を。あげてぞ。泣きければ。地夫辭も共に伏沈みお梅涙のひまよりも。問親御樣をもお誘ひか但し姉樣ばかりか 地なう其の事よ父樣が去年の冬から煩ひて。此の二月の朔日に。六十九にて御臨終明くる二日に煙となし。今日七日の弔ひを兄弟一所に拜まんと。此のお骨を持つて上りしに。弟も同じ骨となし悄々歸つて母樣に。何と申さん定めなの浮世やと フシ又さめ。ぐ〳〵と泣きければ。地久米之介は我が親の骨と聞くより氣も亂れ。お梅は一

目も見ぬ舅。緣といはうか因果といはうか。心に含み目にもるゝ。涙を袖にせきかねてスエテわつと絕え入るばかりなり。地側に臥したる供の下女あれ申し。詞七つの鐘が鳴りまする。善か惡が明けたら知れませう。アヽ地こちはくたびれて。何が善やらあくびやら。フシふらふらねぶる心なき。地アヽそれもさう御用あるも存ぜず。引きとめて長物語はも他生の御緣でこそ。もし久米が事を聞付けなされなば。お知らせを賴みます何れもに別るゝも殊更名殘惜しうて久米之介が臨終の。暇乞をする樣で心細うて悲しやと。物が知らする血のゆかり涙すむるばかりにて。言はず知らせず別れしはオクリ本意なく三重へも亦哀れなり。地堂のこかけに身をひそめ片時も娑婆にゐる内は。見るも聞くも皆罪障夜明けも近づく此の上に。いか成る苦み恥をか見んいざ死なうと呵けば。詞早う死にたうござんする。さりながらこな樣はよそながらも姉御にあひ。親御のお骨の側にて羨しい最期ぢやが。地わしは父樣母樣の悲しい中にも不孝者と。叱られうかと氣にかゝり是が迷ひと成りますと。又泣出せば是々。詞骨に母御の下されし盃は此所に有る。地手に觸れられし物といひ志のこもつた。形見は是ぞと取出す。アヽ有難い背丈の伸びた私を。親の心でいつも童と思うて。抱いて寢て下さんした其の心で死にましよと。盃肌に手を合せ又を持つたる其の顏容。ヲヽきれいな〳〵其方は母の形見を持ち。我は父の骨の側夫婦親子一蓮の。示しの時刻のばされず。只今ぞと脇差拔き。胸に押當て唵阿暮伽。廢瞻者娜摩訶畝捺羅。麼扼鉢頭嚩人嚩攞跛囉鞨囉野。吽と突込む切先の。肝に當ればのりかへりはりたやうんとくり通す。阿吽の息も消え〳〵とのつゝかへしつへ苦む聲。地姉主從は驚きて走り寄つて南無三寶人殺し。人殺しよと呼ばはれども。山中夜中聞く人もフシ泣いて麓へ走りけり。地久米之介身を隱し立歸れば骨桶に。樒を添へて殘したり。押戴き三拜し。分けて賜る骨肉を一つに返す。阿字本不生。阿字の一刀兒なりと咽にぐつと突き立てて。死骸の上に法の花梅と枕を並べける。地水火風の風は山水は谷水土は又。土砂の功德の眞言秘密。善男善女人堂心中。かくとぞ聞えける。る。

右之本令吟覽頌句音節墨譜等不殘毫厘令加筆候可有閉版者也

竹本筑後掾

竹本教博 [印]

重而予以著述之本令校合候畢全可爲正本者歟

近松門左衛門

正本屋　山本九兵衛　版　印

大阪高麗橋壹丁目

山本九右衛門　版